
シアー・ハート・ワールド

わたらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シアー・ハート・ワールド

【Nコード】

N0344Z

【作者名】

わたらい

【あらすじ】

完全心象世界、シアーハートワールド。

それはすべてが偽者で、

それでもすべてが真実の世界。

めくるめく虚像の大伽藍の中で、少年は世界の答えを出す。

序章 証明開始

「まるでお花畑ね…」

あたしは彼の夢に潜り込み、勝手ながら嘆息する。

空は一点の曇りもなく晴れ渡り、柔らかい陽光が惜しげもなく注がれた大地は、色とりどりの花を溢れんばかりに抱えている。

夢の中の世界……《心象世界》は嘘やごまかしのきかない魂の写し身。あたしも、けっこうな数の心象世界を覗いたものだが、心の中にここまでの樂園を持つ人間は彼以外知らない。

いや、断言してもいいだろう。

こんな世界を持ちえるのは彼だけだ。人間である限り、全く汚れずに、純真無垢なまま生きていくなんてことはできない。それはこの世界の必然……いや、構造上の欠陥なのだから。

そう、彼の存在は不正だ。

これでもかというほどに改造を受けた、チートコードの結晶。

だからこそ……だ。

世界の限界を超えた、全く未知なる可能性だからこそ、賭けるに値する。

あたしは樂園の中心で花に囲まれて寝転んでいる彼につかつかと近づき、開口一番こう告げた。

「この世界は無意味よ」

下手な説明や、回りくどい証明はいらない。あまりにも唐突で、理解を拒むかのような物言いではあっても、それでもこの子は理解するはずだから。いや理解するだけでなく、積極的に同意すらするだろう。

この子はそういう子だ。

そういうふうに、あたしが作った。

「意味のない世界に含まれる全ての存在に意味はない。だからあたしは、こんな物もう壊してしまおうと思うわ」

儀式用の細剣^{レイピア}を脳裏に描き、イメージを結晶化させ、作り出す。夢の中の世界であればこういうことも可能だ。あたしは作りだした剣を彼に向けて突きだし、宣戦を布告する。

「あなたはあたしを止めなさい。あたしを殺して、世界を救って見せなさい」

まどろむような瞳で彼はあたしを見つめ続ける。夢の世界において、あたしのようにはっきりと意識を保つことのできる人間は稀だ。恐らく、目を覚ませば彼はあたしの語った言葉など綺麗に忘れ去っているだろう。

ならば、この宣戦はただの自己満足に過ぎず、意味はないのか？
そう見えるだろうが、そうではない。あたしは意味のない全てが嫌いなのだ。

つまり、これは彼に対しての宣戦ではない。

あたしは神に対して宣戦を布告しているのだ。

ねえ神よ。もしあなたが存在しているならば、この子を使ってあたしを止めてみなさい。でないと、あなたごと世界を捻りつぶしてしまうわよ？

P r o o f

トリオ

二

僕は夕暮れに染まる山の斜面を見ながら呆けていた。もう季節はすっかり冬だ。禿げあがってしまった山はあまり目の保養にならない。目の疲れが取れないから勉強を続ける意欲がわかない。でも、勉強以外他にやることもないので、仕方なく山を見ている。ダメな循環に陥ってるな、と僕は一人苦笑した。

実は放課後の教室で、一人冬枯れの景色を見つめているなんて、僕ちよつとかっこいいんじゃないか、なんて思ってもいる。もちろん、恥ずかしいので意識に上ってきた瞬間に消すようにしているけれど。無意識と言うのは制御がきかないから無意識と言うのだ。断じて僕の責ではないことを付言しておく。しかし、そういう無意識のナルシスト分をかき消すときにしてしまう「やれやれ、俺って奴は」という感じの軽い笑みが『輪を掛けてキモい』と先日冬香先輩に言われたのを思い出した。しかし、僕は思う。じゃあ、僕にどうしろって言うんだ、と。

僕は笑って、視線をノートに戻す。するとそこには大きく「きもい」と落書きされていた。馬鹿な……さっきまでこんな文字はなかったはず……。もしやこのノートあれか！何者かの魂が封じ込められていたり、名前を書かれたものが死んじやつたりするオカルティックな奴なのか！と一人パニクっていると、突如後ろから背中を叩かれた。

振り向くと冬香先輩が、笑っていた。

「いやこれは、親切心から言うんだけどね、秋人、貴方^{あきこ}なんでも顔に出し過ぎだよ？ そんなんじゃ社会出て、奸佞邪知の輩と渡り合っつていけないんだから」

「え？ かんねい……？ なにそれ」

冬香先輩は「カーっこれだからゆとりは！」と嘆じた。あんだだつて同じ世代だろうに！ と反射的に言語野のニューロンが発火したが、僕はすんでのところで自分を律し、ツッコまない。

「とうかかね、秋人。なんで貴方こんな時間に教室にいるの？ 部活も委員会も麻薬もやってないでしょ？」

「……いくらボケ続けたって僕はツッコみませんよ。それに、そのことは別に先輩には関係ないでしょ」

「『べ、別に先輩には関係ないでしょ』か。成程、私を待ってたんだ！」

「いやそんな上ずった声してなかったし！ 判決を告げる裁判官顔負けの冷静さだったはずだけど！」

「上出来よ」

しまっ……乗せられた。と思つた時にはもう遅い。幼少の頃から先輩に鍛えられてきた僕は、今や脊髄反射でツッコむ悲しいツッコミシーンと化してしまっているのだ。先輩にだけならいいのだが、赤の他人に対しても不用意な発言を聞かぬやツッコんでしまうので、実は切実に直したい。

けれど、そんな僕の思いを知らず、冬香先輩は腹を抱えて大笑する。芝居じみた、大げさな笑い方だ。このパターンはあれだろう。大げさ笑いから転じて……。

「で、だ」

ピタリと、冬香先輩は笑うのを止めてまた僕を見る。静と動との一瞬の入れ替わりが最高に大物なんだね！ とは冬香先輩ご本人の言だ。彼女お気に入り所作である。見ている方はこの動作、無性に腹立つのだけれど。

「なーんでこんな時間まで学校に残ってるのか、気になるなーお姉ちゃん」

「……」

「頭の中で消滅呪文唱えても私は消えないよ」。ここに、情報公開請求権を行使します！」

「し、してないわそんなこと！ いいかげんしつこいよ。勉強しろ受験生」

「ふん。そんな俗事に囚われていては飛べぬのだよ。いいじゃんかよ（教えるよ）」

そう言つて、先輩は体をくねらせながらの体当たりを開始した。うざい。すごくうざい。特に、体をくねらせる動作が全く何の意味も効果もないのがミソだ。うざさを一挙に次のステージへと上げる。しかし、冬香先輩の場合、うざがらせるのも作戦の内だったりするのだ。この人は阿呆に見えてその実恐ろしく頭が切れるので気が抜けない。

今までの僕は、先輩のその手練手管によつて意のままにいじられてきた。しかし、今回こそはどうしても、あの事を看破されるわけにはいかないのだ。僕は再度、固く決意する。

するとそのとき、全方位から体当たりを仕掛けていた先輩が「なん……だと」とつぶやいて、不意に止まった。ひやりと冷たい汗が頬を伝う。震える瞳で先輩を見ると、案の定その手にはしつかとピンク色の便箋が握られている。

なん……だと。僕は知らず、先輩の言葉を復唱していた。同時に、血を吐くような嘆息が僕の口から洩れる。冬香先輩はいち早く僕の口から情報を割ることを諦め、うざさ極まる体当たり攻撃を隠れ蓑に、虎視眈眈と決定的な情報を強奪しようとしていたのだった。恥ずかしながら、尻のポケットに入れていたのに、全くすられたことに気付けなかった。僕は気を抜いた覚えはない。もはや技と言つより、奇跡と形容したくなる神業だった。

「しつかしまあ」

冬香先輩はニヤニヤと便箋をながめつつ話す。

「この寒いのもう春が来ちゃったわけだ、秋人には。色男は季節感が無くて嫌だね」

「うるさいな訴えるぞ和製ルパン！ うまい事いつてんじゃないよ」

言いながら、僕は左足で床を強く蹴り、冬香先輩に向かって一気に踏み込む。

不意打ちだ。

やられたらやり返す。盗られたなら盗り返すのだ！

「あ
」

先輩は正に啞然、という表現がピッタリとはまる表情のまま棒立ちしている。対して僕は、駿馬が地を駆けるような美しいフォーム。そのうえ、先輩の息を吐くタイミングを完璧に捉えて動き出した。先輩とて人の子である。息を吐くその一瞬には筋肉が緊張を解き、急に動くことはできない。

ゆえにこれは、不可避の一撃だ。

僕はしたり、と口の端を歪ませ、胸元に当てられた、手紙を握っている先輩の右手へと手を伸ばす。この勢いで行けば、手紙だけをひったくるといっわけにはいかない。僕の手はその先の柔らかいクッションまで到達してしまうだろう。セクシャルハラスメント。そんな言葉が刹那、脳裏を過ったものの押し殺す。断じて僕は先輩の胸など触りたくはないのだが、大切なものを取り返すためには仕方がない。ここは戦場なのだ。先輩が悪いんですからねえ！

僕は満面の笑みを浮かべながら呐喊した。

……けれど。

確実に捉えたはずだった。桃色の封筒も、その先にある桃色の感触も。しかし、今握っているのはただ空のみ。これがホントの色即是空なのか。僕はそのとき確かに、悟りの一端を垣間見た。

「未熟千万！　って秋人、あんまり無理に動いたらダメでしょ？」

背後から声がし、振り返る。そこには当然のように、今まで眼前にいたはずのお姉さまがいらっしやる。誰が呼んだか不動学園の紺青彗星、双樹冬香。敵に回して僕ごときが敵う相手ではなかった。彼女は余裕をしゃくしゃく咀嚼し、悪戯小僧のような目線を僕に向ける。

「お兄ちゃんにはもう私がいるのに、この雌豚が色目を使ってきて

るんだね。うん、分かってるよお兄ちゃん。今日の晩御飯までには始末しておくよ……」

「年上の妹とか時代が追いついてないから！ あーもう！ だから知られたくなかったのに」

知られたくなかったのに、はあ……。僕は急激な脱力感に襲われた。この人にかかると、いつもこれだ。神出鬼没で天衣無縫。おまけに容姿端麗で博学偉才という遺伝子操作でも受けているんじゃないかと疑うほどの優秀な人間であるが、そのガキっぽい性格により、その能力はもっぱら僕をいじるために使われる。

「あはは。悪い悪い。そんなふてくされんなよー。お姉ちゃんが相談乗ったげるからさ」

「いらナイよ！」

「またまた。実は結構悩んででしょ？ どう返事したらいいもんかって。『僕は恋愛なんて興味ないけど、相手を傷つけることもできない』でしょ？」

僕はハツとした。冬香先輩の言ったことが図星だったからだ。僕は実際、僕と深い関係になることを欲しているその誰かを、心のどこかで嫌悪していたのだ。なぜか、他人が僕に、強い感情を向けているのがたまらなく嫌だった。もちろん、誰からも構われたくないわけじゃない。友達は欲しいし、できるだけ多くの人と仲良くしたい。だけれど、ある一定のラインを越えて親しんでくる人は嫌なのだ。気持ちが悪いのだ。僕自身、なぜそう思うのかは全く分からないのだが。

そんな僕の秘密を、僕が決して表には出さない感情を、なぜ先輩は知っているんだ。

「秋人ん中じや自分より他人の方が優先する。告白されたら、断われないだろうね」

「なんでそんなこと……」

「分かるよ。竹馬の友なめないですよ？」

それに秋人は読みやすいからねと先輩は笑う。

「いいんじゃないかな。これからの長い人生、色恋沙汰なんて事故みたいな起こる。ここらで対処法を学んでみるのも、さ」

夕日に照らされているせいか、そう言う先輩の表情は少し寂しげにも見えた。

「まあでも、私の可愛い弟に悪い虫がついたら困るし、厳正な審査が必要ね。まずは文章力チエック！」

童女のような弾む「ちえーっく！」の声。さっきまでの神妙な表情は神隠しにあってしまった。ダメだ、読ませるの、ダメ。そんな意思が浮かぶ。しかし、その意思を現実のものにする力がないことは先ほど学んだ。力なき意思のなんと歯がゆいことか。先輩は桃色の封筒の口に手を入れ、今正にその純白の、ちよっという香りのする内容物を引き出す

「止めとけよ」

手紙を引き出す正にその刹那、隼を思わせる黒影が先輩の手を通り過ぎ、そのまま僕の傍に舞い降りた。

「ほいよ、アキ。危なかったな」

「夏輝！」

声をかけられ、手紙を受け取って初めて僕の眼は夏輝を捉えた。人間の視覚には、実は見えておらず、想像で補っている部分があると言いが、夏輝はそれを利用していてもいいのか。人間とは思えない登場だ。揃いもそろって僕の友人達の身体能力は凄まじすぎる。僕は、もうこいつら語尾ににんにんとも付けた方がいんじゃないかろうかと混乱した頭で思う。

「しっかし、ギヤーギヤー煩いからできてみれば、なんつー低レベルな争いしてんだか。今日び小学生だってもっと高尚な議題で争うぜ」

言いながら嘆息。呆れかえったという顔を先輩に向け、幼児を慰めるような手つきで僕の頭を撫でる。

「むつきー！ 何よ人のことを悪者みたいに！ 私は秋人の保護者として、当然のことをしようとしたまででー！」

「過保護すぎんだよババア。手紙を検閲するとか、お前は戦中の特高警察か」

「一個年が上なだけでババア呼ばわりするなとあれほど……！」
両者の視線が交差する線上は正に戦場の趣を呈して、火花が惜しみなく散っている。登場から三分も経っていないのにここまで険悪になれる二人を僕は他に知らない。水と油といおうかトムとジェリーと言おうか。

僕は今正に繰り広げられている壮絶な舌戦を尻目に、この闘争の根源的理由を考えてみる。すなわち、双樹冬香と氷沼夏輝の相容れなさについてだ。まず客観的なデータが挙げられる。冬香先輩は女性で、身長は百五十センチ後半。体重は教えてくれない。対して夏輝は男性で背は百八十センチを超える長身。体重はその細身の外見とは裏腹に、蓄えた筋肉の重さで平均より少し重い。並べてみて気付いたが身体的データだけではなにも判ずることはできないようだ。強いて仲の悪さに関連付けるなら、幼少時の二人は身長が今と逆で、夏輝は先輩にさんざんチビと言われ続けていたが、最近は夏輝に逆襲されていることぐらいだろうか。

試論二。今度は性格面から考える。冬香先輩は僕を相手にするときこそ茶目っ気たっぷり（婉曲表現）だけれど、普段はとても謹厳実直な人だ。家の方針とやらで格闘技から茶道まで種々雑多な習い事をしているが、その全てにおいて手を抜かず、高い技術を習得。なおかつ勉強においても成績上位の座を明け渡したことはなく。その上委員会、行事などでは率先して長の座に就き、人を纏める……。さしずめ彼女は、時間を有効に使うとこんなふうにもなれるんだよ！ というモデルルームといったところか。ルネサンス期の文化が抱いた万能人の空想が結実したような、人間の完成形。地を這う俗人とは隔絶した、天空の紺青彗星。

そんな自分に厳しい彼女は、他人にもまた厳しい。ルール、約束、目標からの逸脱は基本的に許さない。悪く言ってしまうえば口やかましいのだが、それも人の上に立つのに必要な資質なのだろう。僕は

嫌いではない。

対して、自由人なのが夏輝だ。僕は彼との長い付き合いの中で、彼が約束の時間を守ったのを見たことがない。本当に一度もだ。そのせいで、昔は一緒に登下校をしたものだが今は冬香先輩と二人で帰るようになった。寧ろ最近は学校に来ての方が珍しい。聞くところによれば街を社会の学校と自ら定め、日夜サバイバルすることで特殊な技能を習得しているらしい。氷沼流フル課外授業だ。試験もなんにもなく、朝は寢床でぐーぐーだとか。羨ましい。しかし、そんなフリーダムでリバティーな彼ではあるが、その風評と外見とは裏腹に、本当は仁義を重んじる心根の優しいやつだったりする。誰が呼んだか不動学園の御大将。ただし行動基準が夏輝自身にしかないため、たまに無茶苦茶をするので注意が必要である。夏輝を嫌う人達からはセンター街の暗黒皇帝と呼ばれている。好き嫌いが竹を割ったように真つ二つに分かれる性格の持ち主だが、僕は好きだ。

「おいアキ、時間はいいのか」

夏輝からの声を受けハツとする。試論に熱中し過ぎて、手紙に書かれた約束の時間が迫っていることに気付かなかった。しかし、

「夏輝に時間について言われるなんてね」

遅刻魔の夏輝に、である。皮肉ではなく、感動した。自分の子が初めて歩いた時の感触に近い。

「ふっ、俺は女との約束は破ったことがねえ」

「反証ー！」

冬香先輩が跳ねるように大きく手を挙げる。しかし夏輝はそれをまるで視界に入っていないかのように黙殺した。

「いいか、恋愛は電撃戦だ！ 押していけ！ 後で童貞喪失祝いに赤飯持つていつてやる！」

アイサーと夏輝に間延びした返事を返し、僕は教室を出た。冬香先輩はもごもごと必死に何か言おうとしていたが、夏輝の大きな掌に口を塞がれ無念にもその志を遂げられなかった。

合掌。

不思議な女の子

三

逃げたい。このまま帰ってしまいたい。手紙で呼び出された校舎裏の広場で待つ間、ほぼ僕の思考はそれだけで占められていた。それは僕の保守的な性格によるものなのだろうか。『恋愛』という、今までの人生の中でその端緒すら掴めなかった未知なる事態が突如降って湧いたから、僕は困惑しているのだろうか。この嫌悪感は、未知なるものに慣れるまで付き纏うお決まりのもの……慣れてしまえばああ、そんなこともあったと苦笑をまじえて思い返せる、そんなものなのだろうか。それとも、僕、伊佐美秋人という人間は他人からの愛を、自分に対する侵略としか感じ取れない、欠陥製品であるのか。醜悪な巨人が注射針で僕の喉元から青酸を注入し、ピストンの引きざまに全ての肉々しい内容物を吸い上げる。そしてがらんどうになった僕を、自分の求めた形に固定し、針を突き刺して飾る。そんなイメージ。

僕は愛をそんな風にしか感じられないのか。

僕は、前者であることを信じたいと思った。自分が人の好意を悪し様にしか受け取れない最低な奴だなんて、認めたくないから。

夕日が西の空に落ちかけ、空が赤と黒の混じり合った気色悪い色に変わった時、彼女は突如として現れた。いやこう言うところ少し語弊があるかもしれない。実際のところは、僕が「気色悪いな」と空を見上げていたそのときに彼女は僕に近づいて来ていたから、突如現れたように見えただけ。どこぞの冬香先輩のように、彼女が瞬間移動や気配を消して接近してくる超常のモノ、というわけではない。いや、見てはいないから断定はできないが、よもや今日の女子高生は瞬間移動が必修、というわけでもないだろう。けれど、そう冷静に分析しながらも、僕は驚いてわっと小さく声を出してしまった。

責めるなかれ。視線を下げたら急に人がいるって、結構怖い。

「う、ごめんなさい！」

「あ、いえ、ごめんなさい」

謎の女生徒（以後便宜上A子さんとする）は開口一番謝ってきたので、僕も謝る。初対面のよく知らない人なので、腰を四十五度も曲げる本格派にしておいた。よく理由が掴めなくても、とりあえず謝られたら謝り返す。どんな金言よりも身を助ける処世術である。

「え……」

「え？」

挨拶も済んで、それでは本題にはいりましょうと腰を〇度の位置に戻した瞬間、目に入ってきたのはなんと零れんばかり涙を湛えた瞳。意外な事態に陥ると思いが突飛な方向に行ってしまうものだ。

その時僕はもしかしたらこの人は僕の生き別れた姉か妹だったりするんだろつかと考えた。そうでなければ、他人の顔を見てすぐ泣きだすようなことがありえそうもないからだ。いや待て、そんなはずはない。僕は深く息を吸い、冷静な思考を取り戻して、尋ねる。

「あの……どうかした？」

「いえ！ いいんです！ お気になさらず！ 私、ちゃんと覚悟、してきましたから……」

全力で頑張ったものの、会話の意味を解すことはできなかった。

その間もAさんは表情こそ冷静なもの、両目からはひきもきらず涙が流れている。ちよつと怖かった。

そして僕がなにか拭くものはないかとポケットをまさぐったそのとき、不意にAさんは「さよおなら！ 愛しき人！」と声を張り上げ駆けだした。芝居がかったセリフを言う子だな、とぼんやり思ったのも束の間、彼女の姿は夕日を背に浴び、黒点のようにしか見えなくなっていた。それを見て慌てて僕の足も駆けだす。なにがなんだかさっぱりわからないが……いや、だからこそだろつか。このまま終わらせるわけには行かないと思った。

結局、追いついたのは二つ隣の町の河原だった。距離にして十数キ口はある。僕がスパートをかけて彼女の肩を掴み、強引に草っ原に引きずり倒した時、僕の口からはとてつもなく凶暴な高笑いが出た。たぶん原始の記憶が蘇ったのだろう。すさまじい快感だった。見ると、運動で上気し、真っ赤になった顔で彼女も笑っていた。汗と涙で顔をナメクジみたいに濡らしながら、心から笑っていた。もっと息を吸わなければいけないのに、おかしくてしょうがなかった。ひとしきり笑った後、彼女はポツリと言う。

「なんで追いかけてきたんですか」
「え？　なんでって……」

ただ、なんとなく駆け出したのだった。強いて言えば本能だろうか。僕は少し困って言う。

「そりゃ逃げたら追いかけるでしょ、普通」
「それ、普通ですか」

ツボに入ったようで、彼女はまたしても大きく笑う。
「む、なんだよ。こっちこそ聞かせてもらいたいんだけど、君はどうして逃げたのさ」

「どうしてって……それは」
彼女は笑いを止め、俯いて顔を隠すようにしながら、
「負けたら逃げるでしょ、普通。敗軍の将は潔く、です」
「負けた？　負けたって、何に？」

「あーもう！」
憤慨した彼女は草を抜いて僕にぶつける。根に付いた土で制服が汚れた。青臭さが僕の鼻腔の中に充満する。

「皆まで言わせる気ですか！　この鬼！　あなたが！　あなたが私を……」

彼女はしゅんとして、ほとんど聞こえないような声で「フッタから」と呟いた。

フツた？　この僕が？　確かに内心イヤイヤ立っていたのは認めるけれど、それを表に出した覚えなんてない。僕の3分の3は優し

さでできているのだ。

「どうやって」

「え？」

「どうやって僕は、君をつつたの？」

口に出してみるととても奇妙な質問。だけど僕は真剣にそれを知りたかった。

「ごめんなさいって……あなたが言ったんじゃないですか！」

え？ と発話する前に、数十にも及ぶ数の雑草が僕めがけて投げられた。一部は口に入る。どうやら遂に彼女の怒りを心頭に達しさしめてしまったらしい。

しかし、これでようやく分かった。彼女は誤解している。

「待って！」

雑草が織りなす濃密な弾幕を両手でガードし何とか口を開く。

「ごめんなさいって！ ……ぺっ！ それは誤解だよ」

「誤解……？」

薄まる弾幕。好機とばかりに僕は声を張り上げる。

「そう誤解。謝られたら、謝り返す癖があるんだ僕。だからそういう意味じゃない」

「え……じゃあ私……」

女の子は急に俯いて顔を手で覆った。

「あ！ そんな気にしないで。勘違いは誰にでもあるし、今日は久しぶりに汗をかけて楽しかったよ」

だから、そんなに気にやまないでと続けようとしたけれど、覆った掌の下の表情は意外にも笑っていた。

「私、ごめんなさいじゃ……ないんだ」

うん、それは認めるけれど、彼女にとって『ごめんなさいじゃない』という言葉がどういう意味を持つのか。彼女の麻酔でも打ったように弛緩している顔を見ると、僕はちよつと不安になる。『嫌いじゃない』っていうのは好きって意味じゃない……よ？

「私、玉響真弓です」

「あ、僕は伊佐美……」

「知ってるよ、秋人様」

「様!？」

そのまま、うふふふふと、じゃれつく仔犬を見る犬好きのよう
な、決して世人に見せるべきでない笑顔を残して、玉響真弓は宵闇
の町へ消えていった。

夢の中で

四

これは夢の中。そう、僕は眠っている。玉響さんと隣町まで走ってたくただったので、アパートに帰るなり布団に直行したのだった。

夢というのは不思議なものだ。夢を見ているうちは、それが夢だと決して気づかない。僕は時たま思う。脳に備蓄された情報だけでこれだけのリアルを再現できるなら、もはや外界の現実など必要ないのではないか……と。

いや、夢の中ではそれが夢だと気づけないのなら、僕達が現実と呼ぶ景色もまた、本当は夢である可能性を拭えない。

これは、荘子の、『胡蝶の夢』という奴だ。

荘子は夢の中で蝶になり、楽しく飛んで遊ぶ。けれど夢から覚めると自分は一人の荘子という人間であって、蝶ではなかったことを知る。しかし、今の人間としての自分も、蝶が見ている夢なのかもしれない……といったお話。真実がどちらとは、誰にも言えない。

ならば……と更に思考を展開しようとしたとき、僕は気づいた。美しい、天子のような金髪碧眼の少女がこちらを見つめ、微笑んでいる。

いや、これは微笑んでいるんじゃない。

これは……うずうずしていると言った感じだ。何かをしたくて堪らないが、そうしていいのかどうか分からず、欲求をぎりぎりのところで抑えている。

マテの命令を下された犬のような……と表現するのは、彼女に失礼かもしれないけれど。

しかし、彼女は何がしたいのか。

僕の夢の世界は、いつも花畑だ。咲き誇る色とりどりの花を摘み

たいのか？ と考えるも、そうでないことはすぐに分かった。ここは誰かの管理下にある庭というわけではない。ここにある花はすべて野花だ。取りたいなら、取ればいい。また、彼女の眼はじつと僕を見つめている。それは花を愛でるあどけなさからはかけ離れた、何と言うか、知性の光を宿したような眼。

そう、知性。あどけない少女の姿をしていながら、万卷の書物に通曉した老学者のような、そんな老成の感を、少女から感じる。

僕は、彼女に興味を持った。近寄って、話してみようと決意した、その時

「私が思うに」

彼女は、突然僕に向けて語りだした。まるで、僕が彼女と語りたと思ったことを読み取ったかのようなタイミング。

「ああ、そのとおりですよ。私、貴方の思考を読むことができます」

まさか 僕の心に、強い否定が浮かぶ。

「お疑いになるのも分かりますが、本当です。ここは貴方の心象世界であることをお忘れですか？」

ああ、そういえば……ここは僕の夢の中だったか。夢の中なら、何が起きても不思議じゃないな。

「そう。そういうことにして置いてください。で、ですね……貴方の先ほどの思考の、私なりの考えなのですが」

「先ほどの思考？」

「声に出されなくても、思ってくださいただで大丈夫ですよ？」

「生憎、そんな器用じゃなくてね」

「そうですね……先ほどの思考とは『胡蝶の夢』の話です」

「そういえば、そんな思考を展開していたんだっけ。夢と現実に区別など付けられない……という話だったけれど、君ならどう考える？」

「私は、夢と現実の区別は明白だと考えます」

「なるほど。その理由ももちろん聞かせてくれるんだよね？」

「はい、もちろん。夢と現実を分かつ決定的な分水嶺は、『それが夢かもしれないと疑えるか否か』という点です」

「それが夢かもしれないと疑えるか否か……か。難しいな」

「例えば、先の『胡蝶の夢』で言えば、蝶になっただけで、なんらの疑いを抱いていなかった。飛ぶ快樂を味わっていただけで、なんらの疑いを抱いていなかった。しかし、人間に戻った途端に莊子は『これも蝶が見ている夢なのかもしれない』と自己の存在に対する疑念を抱くのです。これは、蝶の時には決して生じなかつた疑問です。夢と現実が対等で、区別がつかないものであるとするなら、蝶も『自分は人間が見ている夢なのかもしれない』と自己の存在を疑わなければ、成り立ちません」

「……言われてみれば、なるほどって感じかな」

「なるほど……ですか。もっとよく考えてください。自分の存在を疑えると言うこと。それが無限に循環する『これは現実か、否か』という底なしの問いの底になるのです」

「底なしの問いの底って……おかしくない？」

「いいえ、おかしくなんてありませんよ？ 底なしと言うものは常に底なのです。底ということはそれ以上下がらないということなのですから」

「あぐあ……君と話していると、頭がねじ切れそうだよ。一体僕の中のどこにそんな知識が入っていたんだ？」

「貴方の中……？ それは、どうしてですか？」

「だって、ここは僕の夢だ。僕の脳が溜め込んだ情報を元に再現されている幻想だ。だから君も、僕が作り出したものであるのに、創造主を超えた知能を持っているから疑問なのさ」

「ふふ……もう一度今の話を考え直してみるといいかもしれませんよ」

もう一度……今の話を。僕は言われたとおりに考え始める。最初から……この夢を辿りなおす。すると……。

「これは……どうということなんだ」

僕は今、夢を見ている。そういう自覚がある。しかし、夢の中で

そんな自覚をもってはいけないのだ。

僕は今、自分の存在を疑えている。

これは、蝶が自分の存在を疑えている状態だ。夢の中の存在なのに、自分が夢見られている幻の存在だと疑えてしまえる。さっきの話……『疑える』と言う事態が存在の確証であるとするなら、今の僕は、夢の中の存在であるのに確かに存在していると言える……。僕が実在するなら、実在する僕が今いるこの場所が実在していないはずがない。

つまり……

「この夢は、実在している？」

混乱した頭で、僕は美しい少女に問いかける。

いや、縋りついたといった方が正しいか。

けれど、彼女は笑って、笑ったまま、遠ざかっていく。

「待って！」

僕の叫びも虚しく、彼女は立ち止まるそぶりすら見せず離れていく。

いや、違う。

離れていつているのは……僕のほうだ。

僕の体は知らず、何かに引きずられるように彼女から引き離されていた。

「また、明日。きっと会いましょう。アキト」

僕の名前を……？ 何で！？ と思うも、彼女は答えてくれない。その代わり、最後に一言だけ彼女は僕に言葉を贈ってくれた。

「大丈夫、全て忘れてしまいますから」

欠陥製品

五

「昨夜はお楽しみでしたね」

舞台俳優のような、無駄に張りのある声で発せられた一言は、冬のすがすがしい空気に満ちた清廉な朝を見事にぶち壊した。反対に、その発言主は満足げな、何かをやり遂げた顔をしている。

そこには勿論冬香先輩がいた。

「楽しんでなんかいません！」

「あれあれ？ その割には大分遅めの御帰宅だったみたいだけど？」

常人なら三十、四十年は生きないと身に付かないであろう嫌らしい口調で先輩は僕をからかう。いつもの朝だ。登校時に夏輝が合流することは稀である。よって、先輩の茶目っ気はもうだれにも止められない。

「別に、ちよつと二つ隣の町まで行っていただけです」

「成程ね」

「え？ なるほどって」

「なかなか頭が回るじゃない。近場だと知人に発見されちゃうかもしれないからね」

ダメだ。どうあらがったところで、昨日の恋文ネタでいじられる運命がつつがなく決定していた。今は夏輝の自由人ぶりを恨む。

「あまりおイタしちゃダメなんだよ？ ノーモア不純異性交遊！」

「ノーモアって、僕は不純異性交遊なんてしたことありませんよ」

それ以上ししない、という意味のはずだノーモア。こんな表現では、僕が不純異性交遊の快楽を貪る性獣で、もうこれ以上はやらせん！ 俺の命に代えても、ここで止めてみせる！ って感じじゃないか。

「ほー、てことは秋人ちゃんはアレですか、純潔なんですか」

「そうです。穢れを知らぬ体です」

そういつて朝の清浄な空気に纏われた清きわが胸を張る。力強い太陽の光が額に気持ちいい。

「じゃあ、童貞だ！」

今度は男のプライドとして軽々しく首肯できない表現が使われた。同じ事象を表すものであるはずなのに、なぜこும்受ける印象が違うのか。言葉というものは不思議だ。知らない内に僕の背骨が曲がり、視線はアスファルトに固定されていた。対して、先輩は「きやはっ」っと澀刺とした笑い声を上げる。

凌辱だった。白昼堂々、辱められた。

これ以上深い精神ダメージを負う前に逃げなければいけないと脳の前頭前野が指令を下す。まだ使ってもいけない剣をへし折られてはかなわないのだ。気付かれぬようストライドはそのままに、僕は足を動かす回転率を上げた。ほとんど走っているような速度までスピードが上がる。もちろん、どんどんと遠く、小さくなっていく先輩の姿。

俺のケツでも拝んでな！ 口の悪いレーサーならそう言語化するであろう、勝利の快哉を胸に感じる。

が、しかし、

「ま、冗談はともかくとして」

しれっと、先輩は付いてきた。普通に並走していた。膝が折れる。

落胆 先輩からは逃げられない！

「本当にこれから付き合っていくつもりなの？」

アスファルトの上に尻もちをつき、女の子のようにへたりこむ僕を助け起こしながら先輩はそう聞いた。さきほどまでとは一転して真剣な面持ちだ。

それを見て、ああ、そうだったのかと僕は気付く。先輩が本当にしたかったのは、この質問だったんだ。さっきまでの冗談は、先輩なりに空気を和ませようという努力の産物、または気恥ずかしさを

ごまかすためのものであったのだ。

僕を…心配してくれている。そう考えると、さっきまでの自分の行動が気恥ずかしくなってくる。先輩の心中を察することができず、凌辱だの、逃げるだのと……。

僕は真剣な表情に謝罪と誠意を込め、先輩の視線を受ける。

しかし、『これから先、本当に付き合っていくのか』とは答えづらい質問だ。

昨日話してみた感じ、玉響さんは悪い人ではない。だけれど、好きか？ 愛しているか？ と問われれば、それは違うとはっきり言い切れる。

ならば、付き合うべきではないのだろうか。

いや、『愛』なんて出会い頭に突如風雲急を告げて落雷のように落ちてくるものじゃない。長い交わりのなかで、徐々に芽吹いてくるものなのではないだろうか。だとしたら付き合つか否かを判じる材料とすべきなのは、相手を将来的に好きになれるかどうかということになる。

しかし、『相手を将来的に好きになれるかどうか』なんてなにをどういふふうに判断すればいいのか見当もつかない。

第一、そういう観点から付き合うことを決定した場合、最初は当然のごとく『好きではないけれど付き合っている』という状態になる。これは道義的に正しいのか。

「僕はどうするのが正しいんだろう」

思考の袋小路に嵌って、僕は思わず答えにはなりえない、単なる思考を漏らしてしまう。けど、これが僕の正直な質問への回答だった。答えに行きつかないということが、答え。言うなれば僕の限界だった。

「私に決めて欲しいの？」

先輩に言われてハツとなった。そうかもしれない。僕は先輩に決めて欲しがっているのかもしれない。なぜか、それが自然な事のようにも感じる。

また一方で、それを強く否定する自分もいる。自分が下すべき「決定」を他人に任せたら、それは自分が自分である必要が無いということだ。僕が僕であるために、その選択の自由を無くしてはいけない。

うん。確かにそうだ。僕は自らの思考に同意する。ならば自分の意思で決定しよう。そう思ったのも束の間、僕の頭ははた、と動かなくなる。

《決定不能》

あれ？ 自分の意思で決めるって、それはどうやるものだったんだっけ？ 今までの十七年間、それを続けてきたはずなのに、僕はそのやり方を知らない。そうできない。

……なんで知らない？ なぜできない？ なぜ、僕は冬香先輩が決定するのが自然だと思ってしまうんだ？

ぐちゃぐちゃに攪拌する思考。僕は気分が悪くなった。まるで湯あたりしたように足に力が入らなくなって、再び膝を付く。

すると、頬に冷たい手が添えられた。冬香先輩の柔らかい掌が僕の頬を撫でてくれる。

「『価値は選ばれたがゆえに、その意味を持つ』何が正しくて、なにがそうでないのかなんて、自分でしか分からないの」

ひんやりと、気持ちのいい先輩の手。しかし頬に感じる、先輩の冷たい手の感覚は一秒ごとに薄くなり、無くなってゆく。

それは先輩が消えてゆくようできて、

実は僕が消えてゆく感覚。

「いつか、秋人が自分で選べるようになるといいね」

耳朶に響く優しい声色。先輩はいつも僕をからかうけれど、優しいから、好きだ。しかし、段々とその優しい音も低く硬質になっていくのが悲しい。ドップラー効果。距離が離れていく証拠。もしくは僕の聴覚が力を失っていつているのか。

感覚が遠ざかっていく感じは、深い穴に落ちていくようだ。大い

なる重力に引き裂かれ、意識は塵に帰りながら、どこまでともしれず僕はただ落ちていった。

夢の中で2

六

「また、はじめまして……ですかね」

僕の夢の中に、美しい少女がいる。僕は彼女を以前に見たことがあるかのようなデジヤビュに襲われるが、こんな少女と知り合った記憶はない。

「いいえ知り合っていますよ」

「!?!」

凶星を指された時のようにドキリとした。なぜ、僕の思考と話を繋げられたのか。まるで僕の思考が読まれているようで、薄気味が悪い。

「はぁ……読めますよ」

まさか、と僕の心に強い否定が浮かぶ。

「このやり取りは、私にとって二度目です」

「……どういうこと?」

「私と貴方は、既に一度会ったことがあります。が、貴方はその記憶を無くしている……私からすればついさっきのことなんですが。」

まあ仕方ありません。この世界は脳を介して見ているものではありませんからね。脳を使って考えている内は、記憶も定着しません」

落ち着いた声で、滅茶苦茶なことを語る少女。

「脳を使わないで、考えられるわけじゃないか」

「そんなことはありませんよ」

あっさりと彼女は言う。

「例えばこんな話があります。ある日、公務員をしている四十四歳のフランス人男性が“左足に力が入らない”ということで病院を訪れました。色々と検査をしてみたものの原因が分からず、彼は最後にCTスキャンで脳内部の映像を撮ることにしました……すると、

驚くべきことが分かったのです」

もったいぶった調子で、彼女は話す。

「彼には、脳がなかった」

「……そんなまさか」

「事実ですよ。目が覚めたら調べてみたかどうか？ ……といつてもこのことを貴方は覚えていられないんですかね」

「はぁ、と彼女はため息を吐く。その様子を見て、なんだか僕は申し訳なくなってきた。

「申し訳ない？ 失礼ですが貴方は少し、変わっていますね」

「……本当に心を読んでもらうんだね。無茶苦茶だな。まあ夢ついているのはそういうものか。ところで、どうして僕が変わっているの？」

「普通怒るでしょうからです。よく知りもしない子供に、訳の分からない理由でため息を吐かれたら。なのに、貴方の世界は少しも変わらない」

彼女は僕達が立っている花畑を指差す。いつもと変わらず、花々は瑞々しく咲き誇っている。

「それを言いたいなら、“変わってる”じゃなくて“優しい”と表現してくれた方が良かったな」

でも、そうか……。と僕は改めて考えて、思う。

「変わっている、という方が僕を表すには相応しいのかもね。実際僕は全く優しくなんてないんだから」

「貴方は……」

彼女は目を細め集中するそぶりを見せた。たぶん、僕の思考を探っているのだろう。僕は彼女のために、分かりやすいイメージを思い浮かべる。

それは一つの、介護用ロボット。

体の不自由な人を介助し、その人のために尽くすということとはとても優しいことだ。当然、人間がそれをやるならその人は“優しい”と賞賛される。

だけど、

それと全く同じことができる介護用ロボットができたとして、そのロボットは優しいと言えるか？

そうは決して言えないだろう。

なぜならそれは、当たり前だからだ。

そうすることしかできないものが、そうしたところでそこに価値はない。誰が、毎日地球が回っていること、夏になればセミが鳴くことに感謝するだろう？ 機械的に盲目のまま行われる行為に、ありがたみなんてものは存在しない。自由がある、善も悪も成せる人間が敢えて善を行うから、その人は優しいと賞賛されるのだ。

僕も同じだ。

僕は優しくすることしかできない。

人を嫌うことができない。人を愛することができない。人を傷つけることができない。人と分かりあうことができない。

だから僕は優しくない。

そこに“優しい”という価値は生じない。

「……なるほど」

彼女はもういいと言いたげな表情で口を開く。僕は不快な思いをさせてしまったようで申し訳なくなる。

「人間じゃありませんね、貴方」

「え……？」

「彼女が貴方を狙うわけ、ようやく分かりました」

デートの約束

七

僕は幼少の頃より体が悪い。慢性的な頭痛を持ち、突発的に意識が混濁することもままある。毎日朝夕の投薬が未だにかかせない。

思い返せば、この病弱という性質が冬香先輩との出会いのきっかけだった。

幼少時、僕は孤独だった。

病弱ゆえ走れず、投げれず、大きい声が出せないという三重苦を背負っていた僕は、どの集団にも属せなかった。子供は残酷で、動物としては純粹だ。最低限の運動能力をも持ちえない個体を群れにいれる利点など、どこにもない。ましてや、それが雄ならば。

僕は淘汰されるべき個体だった。いつも放課後はボールを持ち、駆け出してゆく級友を横目に、惨めさを背負って一人で帰途についた。

そんな時、僕に唯一話しかけてくれたのが冬香お姉ちゃん。今の冬香先輩だった。冬香先輩は最初から人間で、僕に優しくかった。なんの打算もなく僕と付き合い、何の理由もなく僕を守ってくれた。いや、あるいはただ一つ、先輩も得たものがあつたのかもしれない。

それは仲間、友達。

なぜなら先輩もまた一人だったから。

群れるに値する価値がないと判断され孤立した僕。先輩は僕とは全く違って、優れ過ぎているがゆえに一人だった。

先輩は王になる資質と権利があつたがゆえに、既存の群れには入れなかつたのだ。彼女が入れば、パワーバランスが崩れて革命が起きる。そして、乗っ取られてしまうのだ。彼女はそれだけのカリス

マ、能力を備えていた。僕とは正反対の位置にしながら、不思議と二人は同じ境遇にいたのだ。

王と奴隷だけの国。それが僕達を表す最も適切な言葉だった。道端や学校で僕を不意に襲う意識の途絶。しかしいつからか、それにあまり恐怖を感じなくなつた。なぜなら、目覚めればいつも僕だけの王様が傍らにいてくれるから。

「あ、あれ？ 急にどうしちゃった？」

つんつんと肩を突かれる。おっかなびっくり、まるで虫の生死を確認する時のように。

僕はその声を手綱にして、白く深い意識の靄の中から自分を取り戻す。まだ寝呆けているような半覚醒の状態だが、ちらと視線だけ動かして声の方を見やる。

冬香先輩じゃ……ない。

その判断だけは一瞬で出た。特別に親しい知人は、脳の視覚野に専用の回路を設けられ、そのために判断が高速化する。大勢の人が行き来する往来で不思議と知人だけ浮かび上がったように判別できるのはこれが理由だ。つまり、このことから二つの結論が導ける。この傍らにいる女生徒は冬香先輩でないうえに、まだ自分とそう親しくない人であるという結論だ。

じゃあ……誰だ？

目を細め集中。つぶさに観察してみる。まず目を惹くのは腰まで届く、墨で染めた絹のような美髪だろう。手入れに職人の執念じみたものを感じる一級の工芸品だ。モンゴロイドの至宝といつてもいい。

その素晴らしさに感動しながら、頭頂部から髪先まで流されるように視線を動かしていた僕だが、やはり髪だけでは個人を判別することは難しい。やはりここはその黒き二つの大河に囲まれた白き中州、すなわち顔に注目しなければならぬだろう。

この顔の特徴として、大きな目が挙げられる。くつきりと深く穿

たれた脛と脛の間の溝に、自重で今にも地に落ちそうな花卉に似た垂れ目がぶら下がっている。俗に言うタヌキ顔という奴だ。笑顔一つで小さな紛争なら解決してしまいそうな、慈愛の顔。この顔を見ていると知らずに口元が弛んでしまう。

「わ、わ！ ね、ちよつと待とうよ！」

視線を顔から下、すなわちそのポリウーミイなバストに移したところ、制止の声が目元で鳴り響く。……耳元？ ああ、そうか。集中するあまり僕は段々と目標物に近づいてしまっていたみたいだ。まるで宝物を審美する鑑定士のように。……ってそりゃいかん。

「ごめんなさい！」

両手を顔の前で合わせ拝むように頭を下げる。猛省のポーズだ。ちらと脛を薄く開けた隙間からこっそりと覗くと、謎の少女A子さんはそれを見て気恥ずかしそうに微笑んでいた。

……よかつた。示談が成立しそうだ。僕はそつと財布から英世を三枚ばかり抜き取る。

「ちよつと？ なんでもおもむろに三千元！？ さっきから驚いてばかりだよ私！」

いいんや。ええもん見せてもらった礼やで。なんて、氷沼夏輝ならそんな冗談を言い、無理やり三千元を握らせて帰るかもしれない。

ここ日の元の国日本は世間体をなにより重視する文化を持つ。未成年といえど、セクハラで起訴なんてされたら一生後ろ指を指される日蔭者だ。日の元の国なのに日向が狭い。それを考えれば英世の三人ぐらい安すぎる。

「これで、なんとか」

え、えー！！ と顔を真っ赤に染め上げるA子さん。元がかなりの色白なので変化が激しい。僕はふと採血されるとき注射器を連想した。押し込まれたピストンが徐々に元の位置に戻り、それと共に血が注射筒のガラスをじんわりと真っ赤に塗りあげる……ゾツとする（誤用）光景だった。変に奇を狙わずトマトでも連想していれ

ばよかった。

「あう…う私、はお金なんて、貰わなく、ても」

俯き、顔を隠しながら絞り出すようにA子さんは声を出す。

「秋人様が…：そ、そう…：望むなら」

意外なことに、なぜ顔が赤くなるのかについて科学は未だ明確な回答を提示できていない。だから、顔面の赤色化が言語中枢にダメージ、もしくは一時的な機能不全に伴って起こるものであるやもしれないということ、現時点では誰にも否定できない。そんな仮説が思い浮かんでしまうほど、A子さんの言動は意味不明だった。

けれど、僕は気付く。

真つ白だった時はいまいち記憶が喚起されなかったが、このトマト顔には見覚えがある。瞬時に、視覚を通してデジタル処理されたトマト顔が、神経インパルス信号となって記憶領野のニューロンを燃え上がらせる。

「玉響真弓さん」

「はい！」

いい返事。本人確認完了の瞬間だった。どうやら僕は、数十キロ走った後の真つ赤な顔が印象に残りすぎて、素の顔の方を忘れてしまっていたらしい。

僕は気分が良かった。本能的に人は記憶の増大を歓迎するのだから。ひっかかつてはいるものの、ハッキリと思いつけなかった事を独力で思い出せると爽快だ。

しかし、問題は未だ解決されたわけではない。

僕はなぜ、玉響さんと二人きりで放課後の教室にいるのか。それが本来処理すべきタスクで、今やっとスタート地点に立ったのだ。

朝、いつものように冬香先輩と話をしていたことは覚えている。しかし、今窓ガラスから差し込む日の光は容赦なくオレンジだ。よもや、太陽がドッキリに加担しているわけではないだろう。知らぬうちに一日が終わってしまっている。

また、やってしまったのだ。

恐らく冬香先輩が学校まで担ぎ込んでくれて、そのまま僕は自動的に一日を過ごしてしまったのだろう。最近頻度は減ったのだが、僕にはこうなってしまうことがよくある。意識が飛んだその後、自分の意思とは関係なく、自動的に一日を過ごしてしまうのだ。意識途絶中は夢遊病者になってしまおうといったら分かりやすいだろうか。僕自身は何も考えず、何も意図していないのに、勝手に体が動き、日常を送ってしまう。

夏輝にいわせると『羨ましい機能』で、ときたま僕もそう思うのだが、これには弊害もある。それは、当然のことながら夢遊病状態の時には自分の意思が全く働かないことだ。そのせいで、時に普段の僕ならば絶対にしないような奇矯な行動をとってしまうこともある。意識を取り戻すと英文のスピーチコンテストで優勝していたり、素行のよろしくない街のやんちゃな若者達（婉曲表現）が痛めつけ倒され、あまつさえその体を土足で踏みしめていたこともある。

そんな爆弾を、僕は抱えている。

奥の手みたいで格好いいが、現実問題何かしでかしてしまったら、取り返しがつかない症状だ。なので、冬香先輩には僕がそういう状態になったら家にぶち込んでおいてくださいといつもお願いしているのに、面白がっていつもそうしてくれない。お願いする立場だからあまり強く言えないが、せめてもの仕返しに冬香先輩への好感度メーターをワンゲージ下げておく。

気付くと、思案に耽る僕の顔を可憐な瞳が見つめていた。真っ直ぐな視線だ。見つめるといふ行為はある種呪術的な意味を持つという。メドゥーサの眼を見れば石になるといふように、眼差しには相手の行動を縛るといふ効果がある。また、動物の間では目と目を合わせるというのは闘争の合図となる。このように、「見つめる」といふ行為はすくなくならず邪気を含んでしまうものだが、彼女の瞳からは全くそんなものが感じられなかった。彼女のような純真さは、赤ん坊でなければ持ちえないものだ。高校生にしてここまで

純真とは、たぶん、彼女は妖精さんだ。よもや、こんな妖精さんに夢遊中の僕はなにか狼藉を働いていないだろうか。恐る恐る聞いてみる。

「さっきまで秋人様と私が何をしていたか、ですか？」

「やだなあ」と言いながら、口角をこれでもかと上げて彼女はにやける。嫌な予感がしていた。

「高らかに二人の交際開始を神仏に宣言して、初デートのプランを煮詰めていたんじゃないですか？」

このこの〜と肘で小突かれる。たいして鍛えているわけでもなく、脂肪もあまりない僕の胸に固い肘があたり地味に痛い。しかし、驚きと焦りを心の内に隠し、顔は満面の笑みを努めて維持する。

彼女のこの、心からの笑顔を見ていたら間違っても「あ、さっきのそれ夢遊中だったからノーカンな」などとは言えない。

「で、初デートどこ行くことになったんだっけ？ マユりん」

毒を食らわば皿まで。僕は思い切ってバカップルに成りきってみた。するとボンッ！ と付属のソースごと電子レンジに入れちゃったお弁当の断末魔みたいな音がした。彼女の顔が再び赤みを帯びる。どうやら彼女にマユりんは刺激が強すぎたようだ。

「……」

「マユりん？ 教えてくれないかな？」

さらにトマるマユりんの顔。なにか楽しくなってきた。そう思ったのも束の間、小さく「ドSだ……ドSの人だ……」という呻き声が聞こえて、すこし反省。

「今週の日曜、海浜水族館行こうって……」

恥ずかしさに震えるマユりんは遺言を残すようなか細さで言う。

海浜水族館！ その名前には聞きおぼえがあった。確か、夏輝お勧めのデートスポットだ。なんでも、僕らが住む不動市へ向かう電車の終電が異様に早く、乗り過ぎさせやすい上に、水族館周辺は妖しげなホテルのオンパレードなので前提条件は全てクリアらしい。なんの前提条件なのかは敢えて明言しないが。無意識下でそんなス

ポットを選んでしまうとは自分が恐ろしい。いや、生物としての業
というべきか。

「どうかしました？」

「いや、生物って遺伝子が操るロボットのようなものなんだろうかと考えていたんだ」

「ほう、さすが知的！ 高尚ですね」

憧憬の視線が痛い。実態は呆れるほどアニマルで下賤な思考だったからだ。

その後、日曜の約束を確認し、僕は玉響さんと別れた。

ともかく、約束してしまった以上はしょうがない。彼女の告白についてどうしようかと真剣に考えていたのに、しょうもないオチがついたものだ。

「まあ、天命とでも思っただけ諦めるしかないのかな……」

そう独りごちて、僕は気付く。流れに乗るといのは、なんて楽なことなんだろう、と。

帰り道の三人

八

「俺達なんかと帰ってていいのかよ」

いつものように、共に帰るため校門で待っていた僕と冬香先輩に向かつて開口一番夏輝は言った。

「僕は彼女ができても友情を蔑ろにしないタイプ」

「へえ、そりゃ感心」

感心しているようにはとても見えないおどけた笑みを浮かべる夏輝。

「けど、ソツコー振られて俺の胸に泣きながら飛び込んでくるなよ？」

「ハハ、それはない。胸に飛び込むなら先輩にしとく。ここぞとばかりにグリグリする」

「はあ……夏輝と関わったせいで、私の秋人がとんだエロ河童に……」

長息する先輩。いつものパターンで行くと、この後先輩が夏輝に「なんやかやとイチャモンをつけ、一騒動が起きるハズだ。小学校の時から連綿と続く、仲良しグループ」と、僕は思う）の下校。気の合う仲間とだけで構成する閉鎖集団は、何にも増して居心地がよいそれは生まれつき「家族」という構成単位を持つことができなかつた僕が、苦勞して手に入れた安寧の場所。血ではなく心でつながる「家族」だった。

「ねえ、そういえばさ夏輝」

僕は案の定先輩と舌戦を繰り広げはじめた大きな背中に語りかける。

「実は今週の日曜人生初デートなんだけどさ、アドバイス歓迎なんだよ」

「なんでちよつと上から目線なんだよ……。どこ行くんだ？」

「海浜水族館」

「珍しい、お前でも人のアドバイスちゃんと聞くこともあるんだな」
「ホント、珍しいわね」

僕はいつだって人の言うことをよく聞く素直な人間だよといいかけたが、二人の見解が一致しているようなので抜きかけた刀を鞘に戻す。気がつかなかったが、僕は人の意見を聞かないことが多いらしい。要反省。

「俺のお勧めスポットを採用してくれた可愛い弟分には張り切ってデートのなんとたるかを叩きこんでやりたいところだ・が」

「そこ逆接なの？」

「ああ、残念ながらな。オレ様は女にサービスしようなんて思ったことは一度もないし、そうしたこともない」

ニカツと白い歯を出して笑い、胸を張る夏輝。

「亭主関白つてやつだ」

「そつだ。男子たるもの女に媚びるようではイカン。アキ、お前も男なら女の一人や二人アゴで使つて見せろ」

夏輝の発言に、封建時代の考えだわ……と冬香先輩は嘆ずる。

「いい、秋人。あんな蛮族の言葉に耳を貸しちゃだめだからね。二十一世紀は男女同権の時代よ、レディーファーストを常に忘れない紳士でなくちゃ」

「おい、バカ女。なぜ男女同権でレディファーストになる」

バカ女……ぐつと冬香先輩は何かを飲みこんで、夏輝を見下すような顔を作る。身長の関係で実際は見上げる形になっているのだが。

「……女性は色々な面で男性にない不利益を背負ってるの。だからレディーファーストを徹底して初めて男女同権になるのよ。積極的アフターマ格差是正ティファクシヨつてわけ」

ま、あんたみたいなサルには分からないでしょうけど話を結び、勝ち誇る。それを、顔の血管を浮き上がらせながら歪な笑みを作り見下ろす夏輝。

「はい、ストップ」

これ以上ボルテージを上げるのは限界と判断し、試合中止を宣言する。全く、この二人の犬猿の仲は筋金入りだ。緩衝材がなければどこまでもヒートアップして、その熱で地球が爆発するんじゃないかと思う。

「全く、チビ女には構ってられんぜ」

「く……っ。でも秋人に怒られるから我慢よ……じつと我慢の子よ私……」

良い子なので先輩の頭を撫でグッドガールと褒める。

「あ、それとこれは真面目な話なんだけどなアキ」

「どうしたの改まって」

「最近な、海浜水族館の辺りにちよつとヤバイ奴が来てるみたいだよ。なんでも、街から街に渡り歩いてその土地のリーダー格潰して回ってるらしいんだ」

「ワオ、夏輝ピンチじゃない」

「馬鹿、俺なら楽勝だったの。……と、俺本人に来るならなんも問題はねえんだけどさ、俺が心配してるのはお前のことだよアキ。お前は結構俺のツレとして名が広まってるからな。面倒事に巻き込まれるかもしれない」

「了解。気をつけておくよ」

「悪いな……。デート、日曜だったよな？ 当日は俺も周辺にいるようにするから、なんかあったらソッコー呼べよ」

心配性で仲間思いの夏輝だ。まさか人の多い水族館の中で喧嘩に巻き込まれるなんてことがあるとも思えないが、その心遣いには感謝する。

「夏輝、アンタ秋人には素直に謝れるのね……」

「……だからなんだよ」

「ホモ」

「はいストップ！」

僕は再度不穏な空気を肌で感じ取り声を張り上げる。いつものことながらこの二人をみていると、キューバ危機とかバルカン半島といった言葉が想起される。今日も火薬庫の管理人は一瞬たりとも気が抜けなかった。

ひなげしの花の向うに

九

僕の足は、コロッセオを前にして止まる。

目の前のその黄色みがかった外壁はなだらかな曲線を描いており、建物全体を俯瞰視点から見れば正確な真円になっている。

円というのは古来より神聖な図形とされてきた。例えば、中世ドイツの神学者ニコラウス・クザーヌスは「無限に大なる円」というものを仮定し、その図形が円でありつつ点でもあり、また同時に直線でもありうることからそこに三位一体なる神の姿を幻視した。

また、力学的にも非常に安定した構造であり、鉄筋やコンクリートが使われていないコロッセオが建造以来幾度も地震をくぐりぬけて現代にもその姿を留めていられるのにはこれも一つの要因となる。どちらも冬香先輩の受け売りだが。

しかし、今、僕の目の前のコロッセオには鉄筋はおろか種々雑多な現代文明の英知が惜しげもなく投下されている。また、歴史もない。詳しく調べたことはないが、建造されてから十年経ったか経たないかというところではないだろうか。威厳もなにもあったものではない若造だ。

そう、ここはコロッセオはコロッセオでも、僕の住んでいるただのアパートなのだ。名を“コロッセオ不動”という。たまに“コロッセオ不動”だったり“コロッセオ不動”だったりすることもあるけれど。

この現代日本に蘇った円形闘技場はその荒ぶる魂を完全に忘れている。まず、強固な門番であるオートロックが外敵の侵入を許さない。では、建物内部で選ばれし戦士が血で血を洗っているかということとそれも違う。建物内部、円の中心から同心円状に広がる広場では住人一同の当番制で草花が生育され、居住者の憩いの場と化してい

る。当然皆、仲が良い。

「なんで『コロツセオ』にしたか、ですか？ う〜ん、バームクーヘンと迷ったんですけどお〜、ちよつと長いかな？ バームクーヘンじゃあーと思ひましてえ〜」とは管理人の紀奈子さんの談だ。どうころんでも形ありきだったらしい。まあ名は体を表す、名付けの方法として正しいような気が頑張ればしなくもない。

ちなみにこんな間延びした管理人で大丈夫なのかとご心配の向きもあるうが、紀奈子さんは一応大学院（博士課程）を修了したばかりのちやきちやきのインテリである。博士である。ひろしてはなし。しかしまあ精神成形学などという社会のニーズガン無視の学問を専攻してしまつたがために社会に出ることができず、ブラブラさせておくぐらいならと一族の税金逃れの為に建てられたここ『コロツセオ不動産』の管理人となつた。

ぶつちやけてしまえば名ばかりの管理人で、建物管理は専門の管理会社に委託しているのが実情だ。つまり紀奈子さんは今をときめくN・E・E・T、略してNT。ニュータイプ。人類の革新なわけだが、本人の前でそのことは禁句である。「ニートじゃないですううううううう！」と叫びながら暴れ回るので。

自分で落としておいてなんだが、彼女の名誉の為に付け加えておくと紀奈子さんにも一つだけ管理人らしい仕事がある。

居住者の選別だ。

もとより、税金でもっていかれるくらいならということを立てられた建物なので、利益は度外視だ。よつて選別は紀奈子さんの裁量次第できまつてしまう。具体的に言つと、いくら金回りが良くても、誠実そうでもダメで、精神成形学ヘンセイマキナ徒である彼女は観察対象として面白そうな人間を選ぶ。なのでここには一風変わった人間（婉曲表現）しかいない。なんでもご近所さんからは精神病院と揶揄されているとかいないとかだ。

ちなみに僕は紀奈子さんに見出された変人ではないことを付け加えておく。僕だけは「一族」に連なるものとしてここに入れられた。

紀奈子さんとは、はとこにあたる。

なんでも、突然の事故で僕の両親は帰らぬ人となり、相続のゴタゴタのなかで、もともと住んでいた屋敷が人の手に渡ってしまったらしい。しかし、住むところがないといってまだ年端もいかぬ少年だった僕を野に放つわけにもいかない。そこで、收拾がつくまでの物件の一部屋に居を与えられたわけだが、驚いたことに、自分だけで支障なく生活をおくることができたためそのまま放っておかれている。

喉元過ぎれば熱さを忘れる。両親が死んで、その問題が顕在化しているときこそ「一族」の眼にも僕の像が結ばれるが、いったん沈黙化されれば再び忘れ去られる。彼らにとっての焦点は「問題にならない」ことであり、僕を最善な環境におくことではない。少年が一人で暮らすというのは稀有なことではあるが、問題ではない。彼らはそう判断した。

しかし僕はそのことについて恨む気はない。

自分の血を直接分けた集団である「家族」という単位においてさえその崩壊がとりざたされている時代である。「一族」などという古い時代の単位のしかも末端である僕に、だれもかかずらう余裕などないのだ。

寧ろ感謝しなければならいだろう。

こんな学生が住むには不相应なマンションをタダで提供してもらっているのだから。

「ですうつうつうつうつうつ」

暗証番号を入力し、オートロックを抜けると、広場で紀奈子さんが花に水をやっていた。声は聞かなかったことにする。誰しも気分よく自分の世界に入ってしまうことはあるのだ。

「あゝ秋人君、おかえりい」

「どうも。あ、ひなげし、咲きましたね」

紀奈子さんの足元では、十月半ばごろ居住者一同で蒔いた、ひなげしの種がその薄く伸ばした和紙のような赤と白の花々を咲かせて

いた。

「ううん、そうなんです。おかげ様でやっと咲いたよ。ああ、勝手に抜いて燻して気持ちよくなっちゃ駄目だからねえ」

「え、ひなげしってそんな効果があるんですか？」

「うーん、ケシ科だからあ、無きにしも非ずかなあ」

「いやそんな効能多分ないでしょう。そんな危険なものの種を優秀な日本のポリスがホームセンターに置かせるはずがない」

「それもそうかあ、となぜか残念そうに肩を落とす紀奈子さん。これ以上バッドトリップする気だったのだろうか。」

「今日はあ、お友達来てるんですかあ？」

「あ、冬香先輩が夕飯作ってくれてるって」

先輩が僕の背中からひよいと姿を表して軽く会釈をする。

「冬香ちゃんならあ、知ってるかなあ、ひなげしの花言葉」

うら若き乙女のような純真な質問を投げかける紀奈子さんを、先輩は微笑ましく受け止め、答える。

「ひなげし……ポピーの花言葉は『恋の予感』ですよ、伊佐美先生ですううううう、と両手を振り上げて喜ぶ紀奈子さん。僕は努めて、彼女の実年齢などを考え出す無粋な思考を外に追いやる。

「あ……でも、ちょっと待ってくださいね。たしか、赤と白のポピーには特別に意味があったはずなんです。えーと……」

記憶の倉庫を引っかき回しているのだろう。先輩の瞳が左右に揺れる。

「あ」

突然、瞳孔の動きが止まった。

「わかりました？」

先ほどと同じ、莞爾とした笑顔を向ける紀奈子さん。

しかし先輩は、震えるような声で、

「『忘却』『慰め』『感謝』……そして、『目覚め』」
と呟いた。

「夏輝君にも、教えてあげてくださいいねえ？ あの子さびしがり屋

だからあ、三人だけの秘密にしておくよ、むくれちゃうものお」

はい、と折り目正しく応ずる先輩。先輩が僕と夏輝以外の人に対してとても丁寧で殷勤に振舞うのは今に始まったことではない。しかし、この日だけはなぜか、型に ついた習慣でなにかを押し隠すよ
うな、そんなこわばりを感じた。

デート

十

学園までは徒歩で軽々行ける距離に住んでおり、滅多に遠出などしない僕にとつて、未だに電車に乗ることは非日常だ。

やり慣れないことをすると肩がこる。

一体今日一日で僕の肩はどうなってしまうのか。

そんなことを、潮を含んだ風の臭いを嗅ぎながら、ぼけらと考える。

今日は記念すべき初デートである。

気分は接待ゴルフに付き合わされる会社員のそれだが。

まだ先の事だと思っていたが、先週の一週間は早かった。といっても、「現在」という地点から「過去」を振り返ると常に、あつというまに過ぎてしまったとを感じるものだ。光陰矢のごとし。少年老いやすく学なりがたし。しかしなぜこんな感慨を常に持つことになるのか。

僕が思うにそれは、人は自分で過ごした「時」を、永遠に全て記憶できないからである。

時が過ぎゆくほどに、過ごしたはずの「過去」の記憶が欠落していく。しかし人は顧みた時、欠けてしまったピースに気付けないから、「過去」そのものの断片しかなぞれない。

だから感じるのだ。短い、早いと。わずかに残ったピースだけが、自分のすごした「過去」だと誤認するのだ。

人は記憶できた時間しか生きたことを感じられない。忘れてしまった過去なんて存在しなかったと同義なのだ。

しかし 頭ではそう考えていながらも、僕は自分で自分に疑念を持つ。

僕は、幼少期の記憶を持っていない。失ったはずの両親と妹のことも全く思いだせない。

ならば、それも存在しなかったと、そう言ってしまうだろうか。そう言えるとしたら、通りゆく仲睦まじい兄妹を視界に入れるたびに生じる、この寂しさはなんなのだろうか。

……。

そんなことを考えながら物憂く駅から吐き出される人の群れを見やっていると、特別目に止まるものがあつた。

白いワンピースを着た、令嬢然とした女性が人ゴミを掻きわけて走っているのだ。

それは小走りとかではない。

全力疾走である。足も折れよといった野生の走り。三年間の集大成を見せつけようとしている陸上部員のそれだ。

普通、町中において全力疾走中の人間などそう見れるものではない。ましてや、それが女性であればなおさらだ。僕以外にも、何人かの人がその珍しい光景を見ている。

なにかしら、狂気じみている怖い。

僕はそんな女性を見て、口避け女の話思い出した。昭和の子供達を恐怖のドン底に陥れたというアレだ。なんでも口裂け女という奴は百メートル三秒で走るらしい。いくらなんでも速すぎだ。チーターの二倍くらい速い。狙われたら逃げられそうもないので僕は「ぼまーどぼまーど」と念の為對抗呪文を先んじて詠唱 しておく。これでもう近付けまいと、すこし安心し、再度女性に目線をやる。

しかし 僕の心臓は大きく爆ぜた。

段々と、女の姿が視界の中で大きくなってきているのだ。着実に、着実に僕との間合いが詰まる。

僕を狙っている？

いや待て、ハハ、そんなわけないじゃないかと逃げ出そうとする足に理性で渴を入れる。口裂け女なんているはずないじゃないか。昭和ならともかく、今は平成だ。マトモに考えて……そうだ！

僕の後方には水族館の入口がある。多分彼女はこの水族館の従業員なのだろう。遅刻したんで走って職場に向かっている最中なんだよ。このまま彼女は僕を一顧だにせず通り過ぎ、水族館の入り口をくぐるハズだ。大丈夫、大丈夫

では、なかった。

白ワンピースの女が、火花が散りそうな急ブレーキをかけ僕の前で止まる。

終わった……。

僕は恐怖の余り生を諦めた。なぜか冷静に自分の葬儀代は誰が払うのか考え出してしまった

その時。

「ごめんなさい！ 遅れちゃって……」

言いながら、口裂け女（仮）は疾走で顔の前に垂れてしまった。長い長髪を払いのける。

そこには、例のごとく疾走で顔を赤らめた玉響真弓の姿があった。

「イエボクモイマキタトコデス」

恐怖と驚きで、言うべきセリフのイントネーションがおかしくなってしまう。しかし、無理からぬことだった。

「今度から、走ってくるの禁止……」

「え、え！？ それじゃあ秋人様待たせちゃう！」

「いいんだ。僕、DMだから。寧ろもつと待たせて」

本当の理由は言えないので適当にでっちあげてしまったが、もつとマシな理由はなかっただろうか。変なキャラ付けをしてしまった。

「じゃ、じゃあ、秋人様って呼び方も、ホントは嫌だったり？」

「まあ……ね」

別にDMだからとかではなく、単に気恥ずかしいからなのだが。

「うん、じゃあ……」

彼女は面映ゆそうな表情を僕に向け、

「秋、人……」

と、初めて名前を呼び捨ててくれた。

正直、ドキツとした。

世界全体を読み込みなおし、再構成したような、新鮮な感触。新しく開けた視界。

全く、名前を呼び捨てられたくらいで、ちょっと単純すぎやしないか……？

自分へと向けられた苦笑。しかし今は、そんな所作は照れ隠しでしかない。

まさか、僕……

恋に落ちたのか……？

目の前で笑う彼女がなんとも愛おしく思える。しかしそれは小動物や幼児に対して抱く愛おしさとは微妙に違って……なんといえはいいのだろう。

視線が、玉響さんのポリューミィなお胸に向かう。向かってしま

そう。そんな邪な欲情を含んだ、清濁併せ持つ、熱狂じみた愛おしさを、今僕は抱いている。

「女を見たら欲情する。それが男の定義だぜ！ アキ、お前は何も間違っちやいない」

「秋人、落ち着いて。あなたの脳内では今一時的に脳内麻薬物質であるドーパミンとエンドルフィンが多量に生産されている状態にあるわ。その多幸福感はそのため。勢いで公序良俗に反したりしたらダメなんだから！」

そんなことを口ぐちに言う先輩と夏輝の姿が目に見えるようだ。

「秋人！ ねえ水族館開いたみたいだよ、 行こう？」

突然、僕の右腕が彼女の両手で絡まれ、そのふくよかな胸の前へと引つ張られた。一瞬一本背負いでもかけられるのかと思ったが、これは「腕を組む」と表現できる事態だ。

途端、ポーカーフェイスで鳴らした僕の顔面が真っ赤に燃え上がった。

ライジンググサンである。

自分のことはもっと達観した、クールな人間だと思っていたが、今日限りその看板は下ろさなくてはいけないようだ。

人間、自分自身のことが一番よくわからない。

造られた三位一体

十一

水族館をゆつくりと一通り周り終え外にでると、辺りはもうすっかり暗くなっていた。毎度のことながら冬の陽が落ちる早さは一種の詐欺だと僕は思う。

けれど今だけは感謝する。

もしも日が照っていたら、急に気恥ずかしくなってしまうって今のように彼女の手を握ってはいられなかっただろうから。

二人、手を握りながら水族館に併設された海浜公園から夜の海を眺めていると、

「やあやあ、そこのお熱いお二人」

固さのない、親しげな男の声が背後から響いてくる。知り合いだろうかと思ひ振り返ってみると、外灯が射るオレンジの光に背を焼かれながら、見知らぬ華奢な黒いシルエツトがこちらを向いていた。男は口角を上げて続ける。

「最近女運悪くてさ、実は俺、道具みたいに扱われてんだよね。ったくあのクソ女ときたら……。っていきなり不幸な身の上語りだしても困るよな。うん。こっからは益のある話をしよう。意味のある話をしよう」

言いながら、じりじりと寄ってくる謎の男。逆光で相手の表情は読めないが、ひりつくような悪意を感じた。本能的な部分が、関わるな、逃げ出せ！ と警告を与え続ける。

しかし、逃げられない。

いや勿論、自分の足を動かして移動することはできる。背中当たるフェンスを乗り越えて海へ泳ぎ出すことすら可能だ。

しかし、それは単なる移動以上の意味を持たない。

そんなことをしても、コイツからは逃げられない。

なぜか、そういう確信があった。そう確信させるだけの圧力を、シルエットの男は放っていた。

逆に、そんなことをすればコイツのトリガーを引いてしまうことになる。野生動物の世界において、急激な動きというのは開戦の合図だ。死期を早めることになる。

そして、生物として、より長く自分の命を保持しようというのは当然のこと。

だから、僕は動けなかった。

ヤツが目の前に来ても

「良い判断だよ。素人じゃなかなかそういう境地には達せない。ぐずぐずと無駄な努力をしたがるもんだ。アンタは合理的だな」

間近に来て、ヤツの全体像が初めて分かる。

驚いた。

あれだけの威圧感を放っておきながら、身長は僕と同じか、少し低いぐらい。枯れ枝のような細い腕に、少女のような華奢な体。月光に照らされた横顔は青ざめたように白く、死人のようだ。客観的に見て、力比で僕が負ける要素なんてない。

けれどこの、呑まれるような恐怖。

これは狂気が帯びる類のぼんやりとしたプレッシャーではない。

単純に、どちらが生物として上か下かを現す、形をもつ恐怖。

「合理的なオマエに倣って、俺も直球で行く。問うぜ？ オマエは誰だ」

「意外だな。知っててつつかかってきたのかと思ってたよ」

弱みは見せられない。虚勢を張っておく。

僕だけならまだしも、真弓に被害がいくようなことはあってはならない。

「……すつとぼけてるわけでも、ない……か。“メイン”と見て間違いないな」

理解不能な隠語を話す謎の男。“メイン”とは僕のことを指しているのだろうか。口ぶりからして計画性のある、僕個人、すなわち

伊佐美秋人を狙っているようなのに、僕の名前を知らないのはなぜなのか。

「安心しろ、お前はエサだ。直接被害が及ぶことはないだろうよ……大人しく命令にしたがえばな」

滑らかな動作で、細く血管の浮いた腕が僕の肩に置かれる。傍から見れば優しげなその動作も、僕には白蛇がその顎を開き、噛みつかうとしてくるように見えた。

そしてヤツは命令する。

その刀剣のような鋭い瞳をギラつかせ、傲慢な王がそうするように。

「『双樹冬香』『氷沼夏輝』の二人を呼びだすことを許可する」

僕達は倉庫へと連行された。船で運ばれた荷物を一時的に蓄えておくための、広いだけで他に何も無い空間。当然、その設計に人が長く居座ることを想定しているわけもなく、冷たい海風が無慈悲に吹きつけてくる。

しかし、悪事を企むものにとってこれ以上の場所は望めないであろう。

風を防げない薄い壁といえど、人の眼は防げる。そのうえに、人通りが多い区画からも相当に離れていて、何を叫ぼうと届くことはない。特に集荷物が無い今、警備の人間がやってくる確率も絶望的だ。

僕のミスだ。

海浜公園で絡まれた時点で、声を張り上げながらしゃにむに暴れ回って、真弓だけでも逃がすべきだった。威圧感に負けて何もできなかった。ついにさきほどの自分が恨めしい。こんな場所では、真弓の身に最悪の事態さえ起ってしまう。

最悪の事態……。

何を代償に払おうと、それだけはさせない。

強く、隣に座る真弓の肩を抱く。震えが伝わってきた。

「寒いね、大丈夫？」

「う……平気、だよ」

薄く笑って見せる真弓。しかしその唇は原色に近い青に変色していた。

慌てて、自分の上着を脱いではおらせる。

「ちょ、本当に、大丈夫だってば……」

「いいから、着ておいて」

抵抗する彼女に押しつけるようにしてはおらせる。相手の意思を無視して自分の我を通すのは僕の流儀じゃない。普段の僕ならそんなことは決してしない。

けれど今は、エゴだろうと貰かせてもらう。そういう決意を表すものとして、あえてそうした。

「僕はこれから、温まることするからさ。必要ないんだ」

立ち上がって『敵』を見すえる。もう我慢は限界だった。

「おー、怖い怖い。お前、そんな顔できたんだな」

応じるように奴はその小駆を起こして言う。

「もしかして……来たのか？」

「真弓、逃げる！」

トリガーを引くように声を張り上げ、突進する。技もなにもない。地面すれすれまで身を屈め、己が身を砲弾と化して、ただぶつかる。

「うおおおおおおおおお！！」

叫び、自分を鼓舞する。倒せるはずはない。倒せるはずはなくても、組みついて少しでも時間を

！？

なぜだか、僕の視界は天井一杯に広がっていた。さっき、ほんの一瞬前まで、アスファルトの臭いが嗅げるくらいに身を低くしていたはずなのに。口いっぱい鉄の無機質な味が広がっている。僕は我慢できずその不快な液体を吐きだした。足下に、赤い水たまりができる。

思い切り腹を蹴りあげられたのだ。

漠とする意識の中で、やっと結論を出し、後ずさる。もともと敵う相手ではない。それは分かっていた。しかし、足止めもできないとは。

悔しい。

悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい！

けれど。

近くで、ポツポツと水滴の音がする。

寒さで感覚を失った頬に、温かい何かが流れていた。

しかし、その一粒が流れるたび、温かさが徐々に消えていく。

それだけじゃない。

切った口の中の痛み。

不快な鉄の味。

そして、

力なき自分への悔しさも消えていく。

感覚が無くなり、意識が消えてゆく。

万倍にもなった重力に引かれ、奈落へ落ちゆく僕が最後に見たのは、怒れる氷沼夏輝の姿だった。

いや、正確を期すなら違う。

それは『氷沼夏輝』になった僕の姿だ。

僕は……。

そつだ僕は……！

「第二ラウンドだぜクソ野郎……！」

普段なら決して口にしない強い言葉が、僕……いや、俺の口から吐き出される。

真相

二章

一

大学病院の一室。装飾品も、家具も、無駄なものが一切なく、代わりにおびただしい数の書物がまるで床から自生しているかのよう
に積まれている。そんな主の病的な性質が垣間見える不気味な部屋
で、簡素なパイプ椅子に座り老婆と女性が話している。

老婆は、立ち振舞い、服装共に隙がなく、気位の高さが伺える。
華族とでも形容すればその雰囲気を表せるだろうか。そんな、辺り
のものを自然と下に置く、貴族の気品があつた。

対して、その老婆と話す女性はよれた白衣にぞんざいに梳いた長
髪を垂らし、机に肘をつけてだらしなく老婆の話を聞いている。

年の頃は三十代後半だろうか。もっと若いかもしれないが、その
ただのポーズとしての、やっつけ仕事の身だしなみではどうしても
そう見えてしまう。

気だるげで、無気力な印象を受けさせる彼女であるが、実際は真
逆の精神をもっていることが分かる。

なぜそんなことが分かるか。

それは彼女の瞳を見れば分かる。

老婆の話を聞いている彼女の瞳は、まるで恋する少女が意中の相
手を見つめている時のように、らんらんと、眩しいほどに光を放つ
ていた。

「先生、だからこちらの要望は、春人^{はると}を真人間^{ほんじん}に戻してもらおうこと。
ただ、それだけです。由緒ある伊佐美の家……、しかも宗家の嫡男
が気狂いなんてことは許されぬ。治す為なら当方はどんな手段で
も用いますし、用いることを許可します」

「それはわかっているんですけどね」

先生と呼ばれた女は続きを言いづらそうに頭をかく。

「心の治療は、外科みたいに切った貼ったの世界でもなければ、内科のように薬を出して治すようなものでもないわ。我々が扱うのは形のないものですから。治せと言われて、すぐにできるものじゃない」

それを聞いて対面に座る老婆の眼光が鋭く光る。しかし女はそれを気にした風もなく続ける。

「しかも……この患者、伊佐美春人は鬱病や摂食障害なんて軽い障害じゃない。完全な“アスクレレヒオス 廃人”だ。ここから真人間に戻せるのならあたしは医学の神だアスクレレヒオス。ノーベル賞ですら、あたしを称えるには小さすぎる」

「しかし先生は医学の神アスクレレヒオスです。だから今、私はここにいます。有無を言わさぬ老婆の口調に、少し閉口する女性。老婆が結論を急いでいることは分かっているが、もったいぶった話し方をするのは彼女の天性であり、自分でも今更変えることはできないものだった。

「そういつぶうに患者に見込まれるのは医者冥利につきる。けれど……残念ながら貴方の期待を十全に全うすることはできないな。ああ、これは純粹に治療の為に聞くのであって、気を悪くしないで貰いたいんだが……」

すうつと息を吸い一拍置いてから続きを吐き出す。

「伊佐美春人は禁忌を犯した。そうだろうか？」

「……！」
医者の一言に、さすがの老婆もその鉄面皮を崩し、驚きを露わにした。

「ふふ……いや、答えづらいだろうから何も言わなくていい。ここからは私の独り言として話すんだが……我々人は実に様々な、数多くの禁忌を持って生活している。普通各々の文化圏ごとに独自のそれをもつものだが、ただ一つだけ、人類普遍の禁忌となっているの

が“近親相姦”だ」

苦々しげに見すえる老婆を前に、どこか嬉々として話す医者。

「なぜ、これだけが人類絶対の禁忌なのか。いろいろな理由を我々学者はこじつけようとしてきた。遺伝子的に似通った個体同士の生殖は畸形児を産みやすいとか、女性は他のグループとの重要な交易品であるため内部で消費しないと……。しかし、今日の知見ではいずれも実態にそぐわない、単なるこじつけだとされている。実際のところ、全くの謎なんだよ。不思議だろう？ 男の子であれば、父親を殺し母を得たいと思う感情……。つまり“エディプスコンプレックス”を持つことは、広く認められるものであるのに」

「……先生は、春人がおかしくなったのはその禁忌を侵したからだといったいわけですね」

医者の講義に嫌気がさし、口を挟む老婆。しかし、医者のまるで陶酔しているかのよう。

「極稀になんだが……。この禁忌を犯すことで突如として精神を崩壊させる人間がいる。まあそれを原因として禁忌が成立したということに統計学的に数が少なすぎるうえに、『禁忌として認知されていることを犯したから発狂したのではないか』という反論を覆せるものでもないから、あまり俎上に上がる現象でもないんだが。でも、これ以外にないんだな。人が、たった二三日で急に廃人になるなんて事例はね。だから伊佐美春人は」

「先生、御身が大事であるならば、そこから先を探らない方が良いでしょう。冷たく、相手の胸部に穴を穿つような老婆の声。けれど医者は何の臆した風もなく、笑みを湛えて言う。

「ふふ、そう怖い顔をなさらなくてもこの件を外部に漏らす気はないよ。あたしはね、嬉しいんだ。貴重な実験材料が手に入れられて……。ね。“禁忌達成者”なんて、そうそう巡り合えるものじゃない」

ふふ、うふふと漏れる笑い。コーヒーカップを持つ手が歓喜で震

えている。

「普通、どんな種類の精神病患者でもね、喋るし聞くし反応するんだ。我々は我々の常識では量れない行動をする人間を“廃人”や“狂人”と呼んでいるに過ぎない。ですがね、ふふ……禁忌達成者^{エティクス}つてのは全くのがらんどうなんだ。まるで魂だけどこか遠くに行つてしまつたかのように、喋らないし、聞かないし、反応しない。そのうえなんと、放つておくと細胞自殺^{アポトーシス}が起こつて、勝手に肉体的な死をもとげる。まるで世界がその存在を許さないかのようにね……。ふふ……あたしの嬉しさが分かるかな？ あたしの《精神成形》の術は、人間の身体に全く新しい心を作り出すというものだ。けれど、心を持たない人間なんていない。あたしも一応医者のはしくれなんでね、他人の心を壊して新しい心を植え付けるなんて実験をするわけにはいかなかった。……ふふ、理解できたかな？ あたしにとつて、貴方がたのご提案は正に僥倖というより他はない……！」

熱に浮かされた医者とは対照的に、老婆は冷たい声で、

「結論としては、春人を復活させることはできないが、春人の体に新しい精神を植え付け、リヴィングデッドにすることはできるといふことですね」

医者は首を縦に振り、老婆が次の瞬間発するであろう言葉を喜色満面にして待つ。静寂が室内に被うが、一秒にも満たぬ刹那に、老婆の剣のような凜とした声に切り裂かれる。

「いいでしょう。許可を与えます」

かくして、人の心を形成する禁忌の実験が開始された。

造られし魂 四季計画管理記録より

二

生野実験室管理あ号計画管理記録

執筆者 計画主任 生野 萌華

情報種別：極秘

被験体の少年は禁忌達成によって死んだエディプス。従って細胞自死が起こる前に新たな意識を成形しなければならない。スピードが問われる。

まず第一にすべきこととして、非験体の原人格を壊した禁忌に関する記憶を脳内から消しさらなければならぬ。そうしなければ、新たな人格を植え込んだところでたちまち壊されてしまうだろうからだ。しかし、現時点の化学では記憶領野のどこにどういふ種別の記憶が眠っているのかは判明していない。そこで私は、発想の転換を行った。

禁忌の記憶に耐える、抗耐性の人格をまず作ればいいのだと。人間以外の動物において近親交配はさほど珍しくもない。よって動物的本能を主軸に構成した人格を移植することで問題の解決を図れるだろう。

こうして、本能を司る人格『夏輝』が産まれた。

『夏輝』に対する反応実験の成果により、禁忌の記憶を保持する部位を発見できた。そしてその結果から、そこに至る神経接続を破壊し、その記憶を“思い出せない”ものへと変異させることができた。

しかし、後の実験から、強度の暴力的行為（殺人、強姦）の実行によりまだ禁忌の記憶を想起してしまう場合があることが分かった。思い出しづらいというだけで、強い刺激が起これば電氣的シナプス

が発生し、壊された神経接続を再び繋いでしまうのだ。接続部はともかく、領野に手を加えれば記憶保持自体ができなくなる可能性がある。

そこで、私は発想を再度転換し、攻撃能力を剥奪した人格を用意することにした。

こうして、対人を司る『秋人』が産まれた。

秋人は被験体のメイン人格となるべく作られた人格で、クライアントが求める高い社会性を獲得するため、本能を去勢してある。他を攻撃することもなく、何かに執着するわけでもない仏僧のような人格だ。この『秋人』がボディを支配する限り、強度の暴力的行為が行われるハズはなく、それによって再度の人格破壊が起きることもないだろう。

しかし、『秋人』を被検体に移植して観察を続けたところ、ある問題が発生した。

『秋人』は自発的に行動することができなかったのだ。

なるほど、対人特化人格として設計したように、他人の言うことは素直に聞き、従順だ。しかし、ただそれだけなのだ。

指示が出されなければなにもすることはしない。また、自分に与えられた命令ならば、その善し悪しを考えずに全て実行してしまうという問題も見られた。これでは同居人格である『夏輝』により近いうちを飼いならされてしまうことが予想される。

そして『秋人』がつくられた本来の目的を達成することができなくなってしまう。

そこで『秋人』を正しく導く為の人格が必要となった。

こうして知を司る『冬香』が産まれた。

『冬香』は高い学習能力を持って外界の情報を集め、それを元に『秋人』により適切な指示を内部からだし、その人格的完成を目指すという役割が振られている。ただ、その運用目的上、善悪、正否を過敏に、そして厳密に判断してしまったため、通常の人間生活で必要とされるフアジーな判断ができず、簡単に言えば融通が利

かない性格であるため 対人能力値は低い。
また、常に自分の正しさを自覚しているため、多少傲慢な面も見受けられる。

そう、三人格はどれをとっても完全でないのだ。

あくまで、冬香の人間的感情を無視した合理的判断を夏輝の本能的な感情と合わせて秋人が中和し、判断することによってなんとか人間的な外観を保つに至っている。

現時点では一応の完成といったところか。しかし、クライアントはこの結果に満足してしまっている。傍から見れば、『秋人』という新しい人格が完璧に人間をやっているように見えるだろう。内部では三人格の激しいせめぎ合いが起きているとしても……。

この計画は、完成を見ずに終了を宣告されるだろう。私にとってはまだ道半ばだが、クライアントにとっては終わってしまったっていて、計画の主導権はあちらが握っているのだから。

全く、学問的価値を図れない俗人といのは度し難い存在だ。

けれども私もまた認めなければならぬだろう。『秋人』『夏輝』『冬香』を纏めた統合人格……『四季』の完成は、現時点で全く不可能であることを。

今のまま三人格を統合したら、お互いを打ち消し合ってから何も残らない。元のからんどうの春人に戻るだけだ。

三人格の統合には何より時間が必要である。彼らは時が経つにつれ、お互いを学び、その角を削っていくだろう。そして『夏輝』が優しさを、『秋人』が意思を、『冬香』が感情をそれぞれ手に入れた時、遂に計画が成就する。

三人格は統合され、

人類史上最高の人間。

人の完成形として、『四季』が顕現する。

…… 人類の罪は、動物を遙かに超えた大いなる力を持ちながら、魂は動物のままであり続けたことだ。今、地球上に生起している問題は全て欠陥製品である人の意識が、信じず、迷って、争うから起る。

夢想家と笑われるだろうが、進化した魂である私は『四季』こそがそんな世界を終わらせてくれると信じている。

……。

しかして、その時が来るまで私の出番はない。今はただ三人が送る人生を舞台裏から見守るだけだ。幸い、「一族」の若い研究生が私に賛同してくれ、後の三人の管理を任せることができた。だから、私は時が来るまでさらに人の心について学んでいこうと思う。

幸い、この実験の結果から面白い発見ができた。

実験結果が、あまりにも精神分析学者、ジグムント・フロイトの説に似ているのだ。

フロイトの魂の三分説になぞらえれば、エスが夏輝、エゴが秋人、超自我が冬香ということになるうか。あくまで必要に応じて成形していった人格が、フロイトの論を傍証するかなのような形に収まったことは興味深い。精神分析学など純粹に思弁的なもので、実用の学問足りえないという私の所感は、他ならぬ自分自身によって覆されてしまったわけだ。フロイト……あるいはそれに連なるその高弟達の見識の中に、他にもこの世の真実を語る言葉が眠っているかもしれない。

私は与えられた時間でそれを探そうと思う。

人殺しと狂気の覚醒

三

満月が風の海を見下ろしている。音もない静かな埠頭。それはまるでこの夜が、いつもと変わらぬ優しいものだと思えるように。

月は青白い酷薄な笑みを浮かべて地の惨状を愉しんでいた。その冷たい光が照らす人間は三人。いや、彼の視点から見れば、あと登場人物は二人増えているのかもしれない。

彼……伊佐美秋人は目覚めたとき、その光景に驚愕した。

(夏輝……!?!? 先輩!)

悠然と空を仰ぐ小軀の男の足下に、二人の人間が倒れていた。「

氷沼夏輝」と「双樹冬香」だ。

二人は完膚なきまでに敗北していた。

(こんな……こんなことって)

これは彼にとって今まで見たことがないし、見るだろうと予期もしていなかった映像だった。それほど二人は強かったからだ。

その強さは、彼らが作られた人格であったことに由来する。

通常、人間は自分の身体を操作することに関して、特別な意識を持たない。それが当たり前のことだからだ。しかし、作られた人格であり、生後しばらくの間、肉体を操作する権限を与えられなかった彼ら二人にとって、事はそう簡単にはいかなかった。それは最初、人型のロボットを操縦するのにも等しい難行だったのだ。

しかし、その難行を越え、当たり前を意識的に行えるようになって二人は、一つ人類の限界を超えた。

完璧な身体操作術をマスターしたのだ。

それは、古武術と呼ばれる全ての流派がその長い歴史の全てで追い求めつづけ、そしてついには完全な形で会得することができなかった秘中の秘。まさに奥義の名がふさわしい究極の技だった。彼ら

はそれにより相手が生身の人間である以上、負けるはずがない実力を得た。

人類最強……そう名乗ってもいい、それだけの力を持ったのだ。

例えば、彼らは内分泌系に干渉して総合的に身体能力を向上させること　　いわゆる火事場の馬鹿力　　をいつでも必要な時にできだし、神経伝達のを速度を加速させ、ほとんどスロー再生の映像を見るがごとく相手の動きに対処することもできた。

だから、ありえない。

こんな瘦身小軀の、まだ少年の面影すら残る男が二人を押し伏せるなど、あつてはならない光景だった。

「あああああああああああああああああああああああああ楽しいiiiiiiiiiiii!」

小軀の男が月に向かって吠える。

「なんて楽しいいんだよお前ら！　オマケのお前らでここまでやってくれるなんてさあ！

やべえよ！　やばかったよ!」

瞳孔が拡大した瞳は周りの闇よりもなお暗く、まるで空間に穴があいているかのようだった。瞳孔の拡大は交感神経の活発化によるものだ。それは彼がまぎれもなく戦闘態勢に入っていることを意味する。

その狂気の瞳を見上げ、秋人は人生で初めて死の恐怖を感じた。常識で考えれば、ただの喧嘩に生と死などという大層な言葉が混じる余地はない。重犯罪検挙率が九割を超える法治国家で殺人などリスクが高すぎる。

しかし、この瞳はその所持者がそういう常識の埒外にいることを雄弁に語っていた。

月光を背に受けながら、男は倒された秋人へ歩み寄る。逃げようとしても、足が動かない。

「あああ？　動けないのかよ。オーライ！　手え貸してやるよ!」

そう言っつて、男は秋人を抱き起した。その泥酔した友人を介抱す

るような手つきに秋人は困惑する。

(コイツは……なにがしたいんだ)

敵と味方の認識が揺らぐ。対人関係を友好に保つことを目的として作られた人格である秋人に、他人を憎みきることはできない。なされるがまま、動かされる。そして、その歩んでいく先には、

玉響真弓がいた。

逃げ出す時間は十分にあった。ただ、愛する男が一方的に黷られるその光景に足がすくみ、また、彼女の倫理観がどうしても「見捨てて逃げる」という自己中心的な行動を良しとしなかった。たとえ秋人がそれを望んでいたとしても。

今、彼女は呆けたような瞳で、肩で担がれた最愛の男と、それを痛めつけた憎むべき敵の二人を見つめていた。

ハッピーエンドを願って。

彼女が思い描いているのは、喧嘩を通して友情がはぐくまれ、互いの健闘を称えあいながら笑う、そんなありきたりなハッピーエンド。最初こそ紆余曲折があるものの、最終的にはかけがえのない友になる……そんな不器用な友情が誕生する場面を今、自分は見ているのだと、そう信じていた。信じたかった。

しかしそんな痛切な願いは、無残にも裏切られる。

秋人の左手には銀光を放つ一振りのナイフが握られていた。

小軀の男が、両手で包み込むように秋人に握らせたそれは、真っ直ぐ、真弓の方を向いている。

触れたもの全てを斬り裂いてしまうようなナイフ。こうしてただ構えて進んでいるだけでも、裂かれた空気が見えるような鋭さ。

その切っ先の向こうにある少女の瞳は、恐怖に濁るでもなく、怒りに震えるでもなく、ただ、静かな水面のように水を湛えていた。

ズブリ、と嫌な音がして瞬間、

ポツリ

と、乾いた地面に雫が落ちた。

黒い瞳が、その闇を一層濃くする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344z/>

シアー・ハート・ワールド

2011年12月15日00時48分発行